

『御堂閔白集』読解考

——時雨亭文庫本新出歌の部——

妹尾好信

はじめに

従来、『御堂閔白集』の伝本は約三十点が知られていたが、それらはどれも七十三首の歌から成り、末尾が「御返し、殿おはしますほど、やがて」という、次歌の詞書にあたる文でとぎれた形になっていた(冒頭八首と末尾部分を欠く天理図書館蔵の一本を除く)。それで、当然本来はもつと続いていたはずで、もともとはかなり歌数の多い集であったことが想像されていた。ところが、最近、冷泉家時雨亭文庫蔵の「資経本私家集」の中に『法成寺入道殿御集』という外題を有する写本があり、それが九十首の歌を持つ『御堂閔白集』の一本であることがわかった。すなわち、従来の伝本にある歌の後に新たに十七首の歌があることが判明したのである。同書は、平成十五年十二月に『冷泉家時雨亭叢書』第五期・第六十七巻「資経本私家集三」(朝日新聞社刊)として、樋口芳麻呂氏による解題を付して影印行われてその全貌が公開されたのだが、それに先立って平

成十三年の秋、第五期の刊行を予告する広告に新出部分冒頭の写真とともにその存在が知らされた時には、完本と見られる『御堂閔白集』の新たな伝本の発見として話題を呼んだ。

稿者は、平成十一年から十二年にかけて、島原図書館松平文庫蔵本を底本として『御堂閔白集』の読解を試み、次の五編の論考として発表した。

- ①『御堂閔白集』読解考——第一歌群・寛弘元年詠の部——
『国文学研究資料館紀要』第二十六号(平12・3)
- ②『御堂閔白集』読解考——第二歌群・寛弘二年詠の部——
『広島大学文学部紀要』第五十九巻(平11・12)
- ③『御堂閔白集』読解考——第二歌群・寛弘二年詠の部(承前)——
『古代中世国文学』第十四号(平11・12)
- ④『御堂閔白集』読解考——第三歌群・年次不定詠の部——
『広島大学文学部紀要』第六十巻(平12・12)
- ⑤『御堂閔白集』読解考——第三歌群・年次不定詠の部(承前)——
『古代中世国文学』第十六号(平12・12)

その際、⑤の論考の末尾に、「もし、その散逸部分がどこかに埋もれていて、将来その全貌が明らかになったら、我々は『源氏物語』を生んだ平安王朝の最盛期に、政治的にも文化的にも中枢にいた人々の暮らしぶりを、和歌のやりとりを通してその息遣いまでもリアルに眺めることができるかも知れないと思うと、まことに心ときめく気分になるのである」と記した。それから一年もたたぬうちにこ

の新伝本の存在が知らされたのだから、世の中は面白いものである。

平成十六年度の後期に、早速『冷泉家時雨亭叢書』の影印を使って、大学院の演習で新出部分の解説を行なった。本稿はその成果の報告であり、先の五編の論考に続くものでもある。底本を時雨亭文庫本にした以外、本文校訂の方法や形式は前稿までと同様である。

一

〔74〕天の下治めに來たる神なれや君を保てと祈りこそませ

〔74〕（この山の上の社にまつられた神様は）天下を治めるために來た神だからでしょうか、若宮のことを長寿を保てと祈つていらつしやいますよ。

新出部分の最初の歌であるこの74番歌は、従来の伝本の最後の歌73番歌の返歌である。時雨亭文庫本によつて73番歌とそれに続くこの歌の詞書を原文のまま記すと、

ふの殿わか宮の御ひゝなやにさまく
ものうゑなとして山のうゑに神
のやしるありわらはにみてくらもた
せてそれにかける
きみか代にあまくたりける神なれば
ちとせのまつのかなにこそいはへ

御返し 殿おはします程にとやかて

とある。「ふの殿」は春宮傳藤原道綱、「わか宮」は敦成親王（後一条天皇）か敦良親王（後朱雀天皇）のいづれかである。道綱が甥である若宮のために雄屋を贈つてきた。それには精巧な細工がなされていて、各種の木々が植えられ、山の上に社を造つてあつて、童の人形に御幣を持たせてそれに祝いの歌が書かれていたというのである。それに対して、道長が返した歌がこの74番歌である。

この贈答は『秋風集』巻十・神祇・六二二〜六二三に載つており、前稿でもそれによつて解釈した。改めて『秋風集』の伝えを記すと、

後一条院いまだみこにおましましけるとき、たてまつりけるひなやさまさまの本草などうゑて、やまのうへにまつばらあるに神のやしるいはひて、みてくらたたりけるにかきつけて侍りける 皇太后宮大夫みちつな

君が代にあまくたりける神なれば千とせのまつにいはひこそすれ

これのみ侍りてよみ侍りける 法成寺入道前撰政
あめのしたをさめてきたる神なれば君をたもてといのりこそませ

この記事について前稿では、六二二番歌と73番歌の詞書の間に齟齬というべき相違はないことから、「この贈答は、当時存在していた『御堂関白集』をもとに採歌されたと考えてよいのではなからうか」と言い、「となると、光俊が見た、あるいは所持していた『御

『御堂白集』は、現存諸本のように七十三首とそれに続く詞書だけの不完全な形態ではなかった可能性が大きい」と述べた。74番歌以下を備えた伝本が出現した現在、光俊（『秋風集』）の撰者真観が見た『御堂白集』にも74番歌以下があった可能性はより大きくなったが、それが時雨亭文庫本『法成寺入道白集』と同一の本文を有していたかという点ではなく、かなり異なつた本であつたと見るべきだろう。74番歌の歌句についても、第二・三句に異同があり、歌意に若干の相違が生じている。

ところで、74番歌の詞書部分、多くの本は「御かへしとのおはし
ますほどやがて」とある。「程にと」とあるのは、これまでに調査した『御堂白集』諸伝本の中では彰考館文庫蔵の一本（巳八―〇七〇二九）のみである。この本文によれば、「道長殿がいらつしやるうちにと、すぐに（返歌をした）」という意になり、雑屋が届いたところにたまたまいた道長に返歌をせかしたということになる。そうすると、せかしたのは若宮の母である彰子が、あるいはその母である倫子であろう。

二

内侍督殿より、菊に綿わた覆おほひて奉たてませ給たまへり
〔75〕万代よろこをかけたる綿わたに置おく露つゆ（に）君が千歳ちとせの数をこそ見れ

御返（り）

〔76〕菊きくの枝えだに千歳ちとせをかくる 白露しらつゆの繁ひらき数かずをも置おきてけるかな

〔詠〕

尚侍殿（妍子）から、菊に綿を覆つて（道長殿に）さしあげな
さつた。

万代まであれとの願いをこめて覆いかぶせた綿に置く露に、あ
なたの千年もの寿命の数を見ております。

（返事）

菊の枝に千年の寿命を祈つて覆つてくれた綿に、白露が本当に
たくさん置いたものですね。

75番歌の詞書、底本は「きくに口たおほひて」と口部分が紙の損傷のため判読できないが、「わ」の字が想定される。「菊に綿覆ひて」で、九月九日重陽の節句の行事「菊の綿をさす」。「八日のうちに菊の花に真綿を覆つておき、九日の朝、花の露にしめり、香を吸いこんだ綿をとり、この綿で顔や身体を拭くと不老長寿を保つとされ、宇多天皇のころから重陽の節の行事となつた。菊を辟邪および長寿延年の花とする古代中国の思想にもとづく」（『有職故実大辞典』吉川弘文館）という。「九月八日伊勢が家の菊にわたをきせにつかはしたりければ」（『後撰集』三四四詞書、「九月九日、きくのわたをうへの御かたよりたまへるに」（『紫式部集』一一四詞書、「九日わたおほはせしきくをおこせて、みるに、露しげければ」（『和泉式部統集』五八一詞書）などが参考になる。また、『枕草子』第八段

には、「九月九日は、暁がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたく、おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて、つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、ややもせば降り立ちぬべく見えたるもをかし」とあり、『源氏物語』幻巻にも、「九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて」云々とある。

75番歌の第三句も損傷のため「をくつゆ□」と行末の一字が見えないが、「に」を補つてよいであろう。同歌の「万代をかけた」と76番歌の「千歳をかくる」の「かく」は、期間中の継続を表わす意と、綿を覆い被せる意が掛けられていると見られる。76番歌の第三句も「□らつゆの」とあつて「し」の字が見えないが、補つた。

75番歌の作者「内侍督殿は、45・48・50・57・71番歌の詞書に既出の道長の二女妍子。寛弘元年（一〇〇四）十一月任尚侍。同八年（一〇一〇）八月二十三日に女御宣旨を受けているので、この贈答は寛弘七年（一〇一〇）以前の九月九日の出来事である。康保三年（九六六）生まれの道長はすでに四十歳を過ぎていた。当時としては老境にさしかかつたと言える父のために妍子は息災延命を願つて菊の着せ綿を贈つたのであり、道長も娘の気持ちを心から嬉しく思つて返歌したのである。ただし、もし寛弘七年の詠であるならば、この年は『御堂閔白記』によれば「依霖雨停止節会」とあり、長雨のため重陽の節会が取り止めになつてゐる。菊にかぶせられた綿は、露ならぬ雨でぐつしより濡れていたことになりそうである。

なお、76番歌には他書所伝がある。『万代集』巻五・秋下・一一

六〇には「法性寺入道前閔白太政大臣」の作として「題不知」で載る。

歌句に異同はない。また、『秋風集』巻十一・賀・六四九には「菊の露かかりたるを見てよみはべりける」との詞書で作者名「法成寺入道前撰政」として載り、末句「今朝みつるかな」とある。『和漢兼作集』七六三にも見え、詞書「菊の露を見て」、作者名は「法成寺入道前撰政太政大臣」、初句「きくのはに」、末句「けさ見つるかな」とある。このうち、『万代集』の作者名「法性寺入道前閔白太政大臣」では藤原忠通をさすことになつて誤りであることは樋口芳麻呂氏が『冷泉家時雨亭叢書』の「解題」で指摘された通りである。三書とも妍子との贈答の形になつておらず、『秋風集』『和漢兼作集』の詞書からは重陽の節句の日の詠とも限定されなところから、『御堂閔白集』を典拠としたとは考え難い。

三

尼あまのうへ上の九月十日御堂みだう供養くやうさせ給たまはふとて、殿とのの上うへもおはしまして、殿とのの上うへ婦つまらせ給たまはふ、尼あまのうへ上うへは留とどまり給たまはふ

〔77〕嵐あま吹ふく深山ふかやまの里さとに君きみを置おきて心こころも空そらに今日けふは時雨ときぐさ。

御返みこたへ（り）

〔78〕こればかりあはれと思おもふ旅たびはなし我が身みも秋あきも暮くれぬと思おもへば

〔訊〕

尼上(穆子)が九月十日余りの日に御堂の供養をなさるとい
うので、殿の上(倫子)もいらつしやつて、(供養が終わつ
て)殿の上はお帰りになつて、尼上は(御堂に)留まりなさ
つたので、翌朝、道長殿から、
嵐が吹く深い山中の里にあなをを残してきて、私は心も上の空
で、(流す涙が時雨となつて)今日はしぐれていることです。

「返事」

今回ほどしみじみと感慨にふける旅はありません。我が身も老
い衰え、秋の季節も暮れてしまったと思つたので。

「尼上は道長の妻倫子の母藤原穆子、「殿の上」は倫子である。

九月十日余りに穆子が御堂供養を行ない、娘の倫子も参加、しか
し倫子は穆子を残して先に帰つたので、その翌朝倫子の夫道長から
穆子に歌が贈られ、穆子がそれに返したという内容であるが、この
出来事の史実年時は、『御堂関白記』寛弘七年(一〇一〇)八月〜九
月の記事からほぼ確認できる。まず、八月七日の条に、

七日、癸丑、東山観音寺、被渡一糸北方、(請彼寺)

とあり、この時二糸北方穆子は東山の観音寺に行つており、道長
も同寺に詣でている。そして、翌九月二十九日と三十日の記事には、

廿九日、甲辰、一条尼上観音寺作無常所、修小法事、依有慎事、
自不至、女方參堂、四面指願、為僧座并入来人座、北方立菴屋、

為上達部・殿上人座、請七僧卅僧、有七僧法服、母所調、又僧
布施米・絹等送之、上達部八九人許来云々、

卅日、乙巳、早朝至観音寺、与女方歸来、尼女方有送物、装束
一襲、隨身等賜疋絹、入夜參東宮、是従明日依物忌也

とあつて、二十九日に穆子が観音寺に無常所齋所を作り小法事を
行なつたこと、道長は憤むことがあつて行かず、「女方」すなわち倫
子が参堂したこと、翌三十日の早朝に道長は観音寺に行き、倫子と
ともに帰宅したことなどが記される。

この記事によつて、77・78番の贈答が交わされたのは、寛弘七年
(一〇一〇)九月三十日に道長が妻倫子とともに観音寺から帰宅した
「つとめて」、すなわち十月一日の朝のことと考えられる。77番詞書
に「九月十余日」とあるのは史実と相違しており、穆子の詠んだ「我
が身も秋も暮れぬと思へば」という九月尽の表現とも齟齬するので、
何らかの錯誤があるう。あるいは「廿九日」を「十よ日」と誤写したの
かも知れない。

ところが、77番歌は『榮花物語』卷十二「たまのむらぎく」に見え
ており、ここでは、長和五年(一〇一六)七月に穆子が亡くなつて観
音寺で葬儀が行なわれた後、「御果て」(四十九日)が過ぎて帰宅した
倫子から中宮妍子に贈られた歌として載つている。

かの寺より、またの日帰らせたまふぞらなし。あはれに悲し
う、涙を流させたまへり。かしこにおはしましつるほど、宮々
の御使、さへき御使ども、数知らず多くしきり参りつるもめで

たぐぞ。さて帰らせたまひぬ。またの日、中宮に聞えさせたまへり。一条殿より、

嵐吹く深山の里に君を置きて心もそらに今日はしづれぬ

このように、本集とは詠作時期も作者も異なっている。この『榮花物語』の伝えに近いのが『万代集』と『玉葉集』の記事である。

『万代集』卷十八・雑五・三五六三には、

母のおもひにてそのわざのことなどはてにければ、みやこ

にかへりて、しづれのし侍りけるに

従一位源倫子

あらしふくみやまのさとにきみをおきてころもそらにけふぞしづるる

とあり、『玉葉集』卷一七・雑四・二四一九には、

母のみまかりにけるを、九月ばかり観音寺といふ所におく

りおきてまたの日よみ侍りける

従一位倫子

嵐ふくみ山のさとに君をおきて心も空にけふはかへりぬ

とあり、歌句に小異があるが、どちらも母の葬送の後に詠んだ倫子の歌とする点で一致している。中宮妍子に贈った歌とせず、倫子の独詠としているところが『榮花物語』と異なるが、おそらく両書とも『榮花物語』を典拠としてややばかした詞書を記したのでろう。

本集と『榮花物語』とどちらの伝えが信用できるかという点、そ

れは平野由紀子氏が、

榮花物語「玉のむらぎく」では、四十九日の忌籠りから帰った

倫子の歌となり「君をおきて」の「君」は贈答の相手妍子ではなく、

「今は亡き母穆子」を指すが、当時の和歌の用例では「君をおきて」は普通、贈答の相手を指す。この点からも、御堂関白集の伝える事情のほうが無理がなく自然であり、榮花物語編者は、手を加えたことが明白である。

と言われた（『私家集研究のフロンティア——道長と榮花物語』『国文学研究雑誌』第50巻・第4号（平17・4））通り、本集の伝えの方を信じるべきであろう。『榮花物語』は、穆子が生前に墓所を作った時の御堂供養の際に道長が詠んだ歌を転用して母を亡くした悲しみを詠んだ倫子の詠として利用したものと考えられる。それにしても、『万代集』も『玉葉集』もともに『榮花物語』に拠り本集に拠っていないところを見ると、鎌倉時代における『御堂関白集』の流布状況はあまり芳しくなかったと思わざるを得ない。

ところで、『伊勢大輔集』一四に、

一条殿の上、勸修寺にて御堂供養せられしに、ことをかりてかへしおこせたりしに

おく山のためかねのまつをふくかぜに思ひぞいづるそのかみのこと

とあるが、この「勸修寺」は「観音寺」の誤写で、77番歌の詞書にある御堂供養の際の詠歌なのではあるまいか。『御堂関白記』長和五年九月五日条には、穆子の四十九日の法要が行なわれた寺を「観音寺」と記している。もちろん「観音寺」が正しいわけで、「観音寺」と「勸修寺」とは表記上紛らわしかったのかも知れない。山科の勸修寺で

は「おく山」というにはふさわしくなく、東山の泉涌寺とされる観音寺の方が77番歌にある「深山の里」に一致してふさわしいのである。なお、穆子が琴を借りたのは伊勢大輔ではなくて、当然孫の中宮彰子にと考えるべきであろう。

四

齋院に新嘗会の夜奉らせ給へりし

〔79〕 神のます標のわたりもいかならん日かげも見えずさし曇る

かな

〔80〕 さしはへて見ゆるひかげの難ければこの神山もかき曇りつつ

〔四〕

齋院（選子内親王）に新嘗会の夜にさしあげなされた歌

神様のいらつしやる齋院御所のあたりもどんなふうでしようか。

（今日は官人たちがひかげのかづらを冠に垂らして奉仕する新嘗会なのに）日の光も見えず曇っておりますことよ。

（返事）

ことさらにここまで日差しが見えることは難しいので、この齋院御所の神山も一面かき曇ったままです。（新嘗会のひかげのかづらがわざわざ見えることも困難ですので、私の心も今日の天候同様曇っております。）

底本では歌が二首並んでいて連作のように見えるが、歌意から判断して明らかに贈答歌である。80番歌の前に「御返」とあったのが脱落したのである。13・14番歌にも同様の例があった。新嘗会の夜に道長から齋院選子内親王に贈られた歌と、それに対する齋院の返歌となる。底本は「し上」と表記され、「本」と傍書があるが、「新嘗会」のこと。「新上」と「高光集」三三・一・「し上」と「書陵部蔵本『能宣集』二七八）・「新じゃう」と「実方集」五八などと表記されている。大嘗祭が行なわれる天皇の即位後最初の年以外の年の十一月の中の卯の日に行なわれるのが新嘗祭で、その年に収穫された新穀を神々に供え、天皇自身も食する儀式である。

79番歌の末句「さしくもふるかな」とあるが、「ふ」は衍字で、「さしくもるかな」の誤写と見て訂正した。「神のます標のわたり」は、紫野にある齋院御所をさす。「日かげ」は、新嘗会の神事に奉仕する官人が冠の左右に垂らした「ひかげのかづら」と日の光の意の「日影」とを掛ける。新嘗会の夜だということに天候が悪いので、道長は齋院に見舞の歌を贈ったのである。

齋院の返歌である80番歌の初句「さしはへては、わざわざ、ことさらにの意、79番歌の「さしくもる」と同様、「さし」は「ひかげ」の縁語となる。上の句は、宮中から離れた齋院御所にあつては新嘗祭のひかげのかづらが見えることも難しい意。「神山」は神社の境域にある山を言い、上賀茂神社の後方にある山をも「神山」と言うが、ここでは紫野の齋院御所をさして言っている。道長の見舞いに答えて、

こちらにも悪天候で曇ったままですと言ひ、空模様と同様に晴れない
心中の憂いを訴えている。

この贈答の年時を推定するために、新嘗祭の日が悪天候だった年
を調べてみると、『御堂関白記』寛弘七年十一月十七日の条に、

十七日、壬辰、終日雨下、節会如常、上達部多不参、

とあるのが注目される。寛弘三年（一〇〇六）以降この年まで、新嘗
祭に悪天候の記載があるのはこの年のみである（寛弘八年は三条天
皇即位による大嘗祭の年だが停止され、翌長和元年に行なわれてい
る）。新嘗祭のうち辰の日に行なわれる豊明の節会を特に「新嘗会」
と呼ぶとも言われる（『国史大辞典』「新嘗祭」の項）から、この贈答
が交わされたのは寛弘七年（一〇一〇）十一月十七日の夜のことと考
えてよいであろう。

ところで、道長はなぜことさら齋院に見舞の歌を贈り、齋院もそ
れに答えて心中の憂いを訴えたのだらうか。齋院の身辺に何か憂い
をもたらす原因があり、道長もそのことを気にかけていたからでは
なからうか。この贈答が寛弘七年のことであるならば、おそらくそ
れは十一月七日の為平親王の薨去であらう。為平親王は村上天皇の
第四皇子で、母は中宮安子、選子内親王とは十二歳違いの同母兄で
ある。世の信望篤く、冷泉天皇の次の東宮になるべき存在とされた
という（『大鏡』師輔伝）。齋院はわずか十日前にこの兄を亡くした
ばかりで、喪中の身であった。道長は新嘗会の日の悪天候につけて
齋院の心中を思いやり、見舞の歌を贈つたのであらうと思われる。

五

齋院より節分せせぶんのつとめて

〔81〕春知らでおぼつかなきに鶯うぐすの今日けふめづらしきき声を聞かばや

（御返り）

〔82〕上氷うへこほり溶くる風かぜにや鶯うぐすの今日けふを知らする声こゑも通はん

〔訳〕 齋院（選子内親王）から、節分の翌朝に

私は春になつたことも知らなくて気がかりですので、（立春の
日の）今日は鶯の珍しい初音を聞きたいものです。（久しぶり
にあなたからお便りをいただきたいものです。）

ご返事

水の表面の氷を溶かす風に乗つて、鶯が立春の日の今日を知
らせる声も通うことでしょう。（春を告げる鶯の声を聞かれた
ら、閉ざされたあなたのお心も解けてくることでしょう。）

これも齋院と道長との間に交わされた贈答である。節分の翌朝、
すなわち立春の日の朝に、齋院から道長のもとに歌が届き、道長が
それに返歌をしている。

『御堂関白集』には齋院と道長との贈答歌が多く見られるが、中
でも、13・14、18・19、47・48番歌のように、時候の挨拶として齋

院からまず歌が贈られている例が目立つ。ここでは、節分が過ぎて春になつたはずなのにそれもわからずもどかしいので、春を知らせる鶯の初音を聞きたいものだと言つて、斎院は暗に道長からの便りを催促している。道長はそれに答えて、水面の水を溶かす春風に乗つて鶯の立春を知らせる声もきつと届くでしようと言ひ、斎院を励ましてゐる。これも道長と斎院の親密な交流ぶりがよく表われた贈答である。82番歌の「上水溶くる風」には、『古今集』巻一・春上・二の貫之歌「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」に關して指摘されるのと同様、『礼記』『月令』の「東風解凍」云々が踏まえられていよう。『和泉式部集』三三〇に、

節分のつとめて

けふよりはあしまの水やゆるからんたるのたちどのこほりうす
れて

とあるのも同趣の発想である。

斎院が「春知らでおほつかなき」と言つたのは、これもおそらく兄為平親王の喪中であることを表わしているのであろうと思う。配列上、詠作時期が前歌に続くを見ると、この贈答は寛弘八年の立春の日の出来事と考えられるが、同年は年内立春で、寛弘七年十二月二十五日のことである（湯浅吉美編『日本暦日便覧』（汲古書院 昭63）による）。為平親王が薨去した十一月七日からは四十八日目にあたり、ちょうど中陰明けの頃となる。「喪葬令」によれば兄弟姉妹の服紀（服喪の期間）は三箇月である。節分が過ぎて春の訪れを実

感することもない喪中の身の寂しさを斎院は道長に訴えた。そんな時、道長はいつもうまく斎院を励まし元気づけるのであつた。

六

子の日のまたの日、宮より内侍督殿に

〔83〕音すやと松も過ぎにし鶯の初音いづれの（たづきありけん

御返事

〔84〕飛火野の野辺に木伝ふ鶯は都の外に声ぞ古るさぬ

〔返〕

子の日の翌日、中宮（彰子）から尚侍殿（妍子）に

声が聞こえるかと待つていたのに（聞こえないまま）子の日の小松を引く日も過ぎてしまいました。そんな鶯の初音を聞くにはどんな手立てがあつたといふのでしょうか。

（返事）

（奈良の都の）飛火野の野辺に木々を伝つて鳴く鶯は、決して都の外で声が古くなるまで鳴くといふことはありません。（この都でも初音はすぐに聞こえることでしょうか。）

子の日の翌日、中宮（彰子）から妹の尚侍妍子に贈られた歌と妍子の返歌である。「子の日は、正月最初の子の日に行なわれる年中行事で、野外に出て小松を引き、若菜を摘んで不老長寿を願つた。立春

の日の詠である前歌から時間の流れに添った配列と見られるので、おそらくこれは寛弘八年(一〇一一)の初子の日の翌日に交わされた贈答である。

この年の初子の日は正月二日、前年二月に閏月があったため、太陽曆に直すと二月七日にあたり、通常よりやや遅い春である(『日本暦日便覧』)。それでもまだ鶯の初音は聞かれなかつたようで、彰子は子の日を過ぎても待たれる鶯の声が聞こえないことをもどかしがる歌を妍子に贈った。もつともそれは表の意味で、裏には新年になつても便りもよこさない妹に文句を言つているのである。

83番歌の下の句、底本は「はつねいつれの□つきありけん」とあり、一字分空白があつて「本」と傍書している。親本に損傷があつて読めなかつたのであろう。欠字の想定は容易でないが、仮に「た」を補い、「初音いつれのたつきありけん」と読んでみた。「たつきは、方法・手段の意。早く鶯の初音を聞くためにはどのような手段があつたらうかと言つているのだが、実際にはそんな手段はあるはずもないので「たつきなし」、鶯がその気にならない限りお手上げだと言つているのだと解される。かなり強い調子で声を聞かせない鶯を批判し、同時に便りを寄こさない妍子を責めていることになる。

これに対し、妍子の返歌は、子の日の連想で若菜摘みの名所である奈良の飛火野(とびひの)を持ち出し(とぶに鶯が「飛ぶ」を響かせ)、奈良の都の飛火野の野辺で木々を伝つて飛びながら鳴く鶯は、声が古くなるまで都の外にいろははありません、やがてこの都でも声が聞

かれることでしょう、と姉の焦燥を慰めているが、無沙汰を咎められたことはうまくはぐらかした形になつていゝ。気のおけぬ姉妹間のはほえましい応酬というべきであらう。「飛火野」は、奈良の春日野の一角。「古今集」巻一・春上・一八の「かすがののとぶひのもりいでて見よ今いくかありてわかになつてむ」(よみ人しらず)で知られる。あるいは、彰子が歌を贈つてきたことから、「とぶひ」に「問ふ日」を重ねているかも知れない。「うづゑつきつままほしきはたまさかに君がとぶひのわかななりけり」(『後拾遺集』巻一・春上・三三・伊勢大輔)のように詠まれた歌もある。

七

〔85〕 花ながらいつまでか見んうしろめた風の前なる紅の梅
侍従中納言のもとにて人の詠みける、風前紅梅

また

〔86〕 色染むる雨もこそあれ梅の花風は心もなきかとぞ見る
侍従中納言(藤原行感のもと)である人が詠んだ歌、風前の

八

紅梅

花が咲いたままでいつまで見ることができようか、気がかりなことだ。風が吹きあたる所にある紅の梅よ、

また

梅の花の色を美しく染める雨もあるというのに、（散らすばかりの）風は美しいものをめぐる心もないのかと見える。

「侍従中納言」は、藤原行成であろう。寛弘六年（一〇〇九）三月四日任権中納言。従二位、皇太后宮権大夫、侍従。寛仁三年（一〇一九）十二月二十一日の大宰権帥兼任まで侍従、同四年（一〇二〇）十一月二十九日の任権大納言まで権中納言であった（『公卿補任』）から、寛弘六年三月から寛仁三年十二月まで「侍従中納言」と呼ばれ得る。これまでの歌の配列から見ても、これはおそらく寛弘八年春の詠歌である。『御堂関白記』にも、同年二月二日の条に「侍従中納言」行成の名が見えている。ただし、『御堂関白記』にも『権記』にも同年春の行成邸での歌会についての記事は見えない。

この二首の歌の題「風前紅梅」は、風の吹きあたるところに咲く紅梅の意だが、同題は平安朝において他書に見えない。『平安和歌歌題索引』（翟麦会編 昭社）によれば、「風前〇〇」の題は慈円・寂蓮・西行など新古今時代あたりから見えるようである。その意味で平安中期に「風前紅梅」の題で詠まれていることは注目に値すると言えるかも知れない。もっとも、『和泉式部続集』一三四には、「よひのおもひ」の題で、「いとへどもきえぬ身ぞうきうらやまし風の前のよひのともし火」という歌がある。

85・86番ともに詠者名は不明である。同一人とも別人ともとれる。両歌とも平明な歌だが、85番歌の下の句「風の前なる紅の梅」はあま

りに歌題そのままの表現で、題詠歌の詠み方としていかかと思われる。「風の前なる」という表現は、『和泉式部続集』には先にあげた歌の他に、「日をへつつ我なに事をおもはまし風のまへなるこのはなりせば」（六三七）という歌もあり、また紅梅を「紅の梅」と詠むのも、『和泉式部集』八三九に「さくらよりいろはさこそはふかからめかさへことなりくれなるのむめ」という歌がある。何となくだが、和泉式部歌の表現に影響を受けた歌のようにも思われる。

86番歌に詠まれた春雨が紅梅の色を染めるという発想は、たとえば『元輔集』七七の「春雨やふりてそむらんくなるの色こくみゆる梅の花がさ」、また花を散らす風に対して心がないと見るのは、『義孝集』六五の「このはるもきみをばまちつさくらばなかせのころのなきにやあるらん」などの歌が参考になろう。

ところで、問題なのは、この二首がなぜ『御堂関白集』に入っているのかということである。「人のよみける」という詞書は、明らかに御堂関白家の人物ではない某人が詠んだという書き方である。それでは『御堂関白集』に採られる理由がない。不思議なことである。思うに、本来86番歌の後にさらに連続した詠歌があつて、そこに御堂関白家ゆかりの人物の歌が含まれていたのだが、転写上のミスで脱落してしまったのではないだろうか。次項で述べるように、続く87番歌の詞書には「御返」とあるが、86番歌の返歌でないことは明瞭で、間違いなく贈歌を脱している。実は87番歌に対する贈歌だけではなく、この間には数首の歌が脱落しているのではないかと思わ

れるのである。底本は86番歌で第17丁表が終わり、87番歌の詞書から第17丁裏となる。丁の表裏であるから底本の落丁ということはないが、親本以前の段階に落丁があったか、底本書写の際に親本の丁を重ねてめくってしまい、1丁分の脱落が生じてしまったという可能性はあろう。脱落した部分にあった御堂関白家ゆかりの人物の歌が誰のどのような歌であったかは知るすべがない。左大臣道長であることは考え難いが、行成と同じく権中納言であった左衛門督頼通あたりであることは十分考えられよう。寛弘八年(一〇一一)春のことだとすると、行成は四十歳、頼通は二十歳であった。

八

御返(り)

〔87〕もろかづら二葉ふたながらも君きみにかくあふひや神かみのしるしなるらん

〔訳〕返事

もろかづらを飾って祝う賀茂祭の今日、こうして幼いながらも(お二人の)若宮にお会いできたのは、賀茂明神のご利益でしょうが。

この歌は、『後拾遺集』『榮花物語』『大鏡』『古本説話集』などに採られた極めて著名な和歌謡話に見える一首である。

『後拾遺集』卷十九・雑五・一一〇七、一一〇八には次のようにある。

後一条院をさなくおはしましける時まつりごらんじけるに
いつきのわたり侍けるをり、入道前太政大臣いだきたてまつりて侍けるをみたてまつりてのちに太政大臣のもとにつかはしける
選子内親王

ひかりいづるあふひのかげをみてしかばとしへにけるもうれし
かりけり
かへし
入道前太政大臣

もろかづらふたばながらもきみにかくあふひや神のしるしなるらん

後一条院(敦成親王)がまだ幼かった時、賀茂祭を見物したのだが、齋院が通った際、入道太政大臣(道長)が親王を抱いているのを見て、後に太政大臣のもとに歌を贈った。「もろかづら」の歌は道長が詠んだその返歌である。『榮花物語』卷八「はつはな」にもほぼ同様の話として載る。齋院が親王を見た件は、「大鏡、これはいかがとて、若宮を抱きたてまつりたまひて、御簾をかかげさせたまへれば、齋院の御輿の帷かたびらより、御扇をさし出でさせたまへるは、見たてまつらせたまふなるべし」とあつて、より鮮明に描かれている。「大鏡」師輔伝では、道長は当代(後一条天皇)と東宮(後朱雀天皇)敦良親王の二人を膝に乗せて見物していたとあり、齋院の歌は大宮(皇太后彰子)に贈られたとある。返歌も道長ではなく大宮の詠とな

る。『古本説話集』「大齋院事第二」の記事もほぼ『大鏡』と同じ行文だが、齋院の歌は「おほと」に贈られたとあり、返歌も道長詠である。異同はあつても、いずれの伝えも「もろかづら」の歌は齋院の「ひかりいづる」の歌の返歌として載せられている。したがつて、前項で述べた通り、87番歌の前には確実に「ひかりいづる」の歌が脱落していると見なければならぬ。『大鏡』が、齋院が若宮の母たる大宮彰子に歌を贈り、彰子が「もろかづら」の歌を返したとするのも意味がありそうに見えるが、おそらく「大殿」と「大宮」を取り違えた誤伝で、齋院と道長との贈答とするのが正しいだろう。よつて、87番歌の詠者は道長と考えたい。

「もろかづら」は、桂の折り枝に葵を付けたもので、賀茂祭の際に車の簾や冠に飾る。「二葉ながらも」は、飾りに用いる双葉葵と若宮が幼いことを表わすが、『大鏡』や『古本説話集』のごとく二人の親王を同時に見せたのならば二人一緒にの意も含まれる。「あふひ」は「あふ日」と「葵」の掛詞である。『大鏡』には末句「ゆるしなるらむ」とあり、賀茂明神のお許しによるものなのでしようの意となる。さて、詠作年時だが、『栄花物語』ではこの話を寛弘七年（一〇四月の条に記している。「中宮の若宮、いみじういとうつくしうて走りありかせたまふ。今年は三つにならせたまふ。四月には殿、一条の御棧敷にて若宮に物御覽せさせたまふ」と、三歳の敦成親王に祭見物をさせたというのである。『御堂関白記』同年四月二十五日条には「見祭還、若宮出給」云々とあつて、道長が若宮と

もに祭の帰さを見物したことは史実である。ところが、翌寛弘八年四月十八日の記事にも、「暁従内若宮・三宮・尚侍同道御一条家敷敷室」云々とあり、この年は若宮（敦成親王）・三宮（敦良親王・尚侍（妍子）と同道して一条の棧敷で賀茂祭を見物しているから、『大鏡』や『古本説話集』のように二人の親王を齋院に見せたというのならばこの時のことである。齋院の贈歌とその詞書が脱落しているため若宮一人なのか若宮と三宮の二人なのかわからず、どちらの年のことなのか判断できないが、『御堂関白集』の配列から言つて、おそらく寛弘八年のことと考えられ、四月十八日の賀茂祭の後数日の間の詠ということになる。なお、本集により齋院と道長の贈答が寛弘八年の賀茂祭のことと確認できるならば、詠歌の史実としては『後拾遺集』や『栄花物語』ではなく、『大鏡』（ただし彰子との贈答とするのは誤り）や『古本説話集』の伝えの方が正しいということになる。そして、親王は一人ではなく二人であつた。

九

内侍督殿より、洲浜に鶴立てて、
葵玉・菖蒲の輿などあり

〔88〕万代の齡をこめて菖蒲草長きためしと今日ぞ聞きつる

御返り

〔89〕心根の浅からぬにや引きつらんすべては見えぬ菖蒲なりけり

左衛門督殿より

〔90〕隠れ沼の深きためしに引きつれば菖蒲は浅き心地こそすれ

〔訳〕

尚侍殿(妍子)から(の贈り物)、洲浜に鶴を立てて、菜玉や菖蒲の輿などがある。

(父君に)万代までのご寿命をとの願いをこめてこの菖蒲草を引きました。(この根の長さが)ご寿命が長い例になると今日聞きましたので。

ご返事

あなたの(私に対する)お心根が浅くないという沼で引いたからでしょうか、尋常な長さとは見えない菖蒲の根だことよ。

左衛門督殿(藤原頼通)から(の贈り物)

私は隠れ沼の深さを志の深い例として引きましたものですから、この菖蒲の根の長さではまた志が浅いような気持ちがいま

す。
五月五日端午の節句の贈り物として、尚侍妍子から道長へ洲浜に添えて和歌が贈られ、道長はそれに返歌した。また、左衛門督頼通からも菖蒲に付けた和歌が届けられたというもの。妍子の任尚侍は寛弘元年(一〇〇四)十一月二十七日(『御堂関白記』)、寛弘八年(一〇一三)八月二十三日の女御宣旨(『御堂関白記』、『日本紀略』)

まで尚侍であった。頼通の左衛門督在任は寛弘六年(一〇〇九)三月四日から長和二年(一〇一三)六月二十三日まで(『公卿補任』)である。配列上このやりとりが寛弘八年(一〇一三)五月五日のことと考えて呼称に問題はない。

88番歌の詞書に「つひたて」とあるのは「つるたて」の誤写と見て訂正した。『能宣集』三六九に、

おなじこと(注)五月五日に、すはまにつるをたてて、菖蒲をくはせてかくれうに

ちよよさすみぎはのたつもとしごとにつふのあやめはかみにとぞおもふ

とあるのが参考になる。『拾遺集』巻五・賀・二七三の詞書には、「天暦のみかど四十になりおはしましける時、山しなでらに金泥寿命経四十巻をかき供養したてまつりて、御巻数つるにくはせてすはまにたてたりけり」云々とあるので、ここでも88番歌は洲浜に立てた作り物の鶴にくわえさせてあったのかも知れない。

「菜玉」は、端午の節句に、邪気を払うために柱や簾などにかけた。『御堂関白集』では、57番歌も妍子から菜玉につけて贈られたものである。「菖蒲の輿」も端午の節句に用いる菖蒲で飾った輿形の作り物である。鶴を立てた洲浜と言い、菜玉や菖蒲の輿と言い、どれも見事な細工であり、添えられた菖蒲の根の長さもまた見事なものであったのだろう。88番歌には父親を思う気持ちとともにこの贈り物に対する妍子の自信がみなぎっている。ただし、末句「けふそき」

つる」は「けふそひきつる」の誤りと見た方が解釈しやすい。57番歌の「長きよのためしにひけば菖蒲草」云々も同発想の表現である。

道長の89番歌は平易な返礼の歌だが、上の句「心根の浅からぬにや引きつらん」の「ぬ」には「沼」が掛けてあるのであろう。「心根の浅から沼」という沼で引いた菖蒲の根だから尋常でない長さだと言っているのである。「心根」に菖蒲の根を掛けた歌の例には、「心ねのほどをみするぞあやめ草くさのゆかりにひきかけねども」（和泉式部集）七三二）などがある。

さて、90番歌は左衛門督頼通からのものである。同じ日に頼通からも菖蒲が届けられたのであろう。『御堂関白集』では1・2・30・34・59番歌の詞書に「左衛門督」の呼称が見えるが、第一・第二歌群では藤原公任（長保三年十月三日）寛弘六年三月四日在任を指し、第三歌群では頼通（寛弘六年三月四日任）を指す。公任の場合は「左衛門督」、頼通の場合は「左衛門督殿」と呼び分けられているようだ。「隠れ沼」は草などの陰に隠れて外から見えない沼のことで、歌ではしばしば深い沼の意にも詠まれる。菖蒲草との関連で詠まれた例に「かくれぬのふかきにひけるあやめぐさ心ながさをくらべてぞみる」（『輔親集』一一一）がある。

時雨亭文庫蔵『法成寺入道殿御集』はこの90番歌で終わっており、頼通の歌に対する返歌はない。妍子の歌にだけ返歌をして頼通の歌にはしなかったとは考え難いので、返歌はあったが何らかの理由で記録されなかったのであろうか。が、親本がここでとぎれていたの

でこの歌で終わつた形になつてゐるが、本来は道長の返歌以下、歌集はさらに続いてゐた可能性がある。御堂関白家の人びとの詠歌を詠作年時順に配列するという本集の基本的性格から言つても、寛弘八年の途中、五月五日の詠で終わる理由は見出し難いのである。

おわりに

以上、時雨亭文庫蔵（資経本私家集）本『法成寺入道殿御集』によつて『御堂関白集』の新出歌の部分を読解してきた。まだ十分に解説できていない箇所もあるが、本集の性質として次の三点が明らかになつた。

①和歌は詠作年時順に配列されており、新出部分は寛弘七年（一〇一〇）の秋九月から翌八年（一〇一一）の夏五月までであると見て齟齬がないこと。新出部分は流布本の第三歌群からそのまま繋がつてゐるので、47番以降の第三歌群そのものが寛弘七年の詠である可能性が大きくなる。第三歌群が寛弘七年の詠草を月次順に配列したものであると主張されたのは森田奈々氏（御堂関白集の基礎的研究）お茶の水女子大学『国文』第九十三号（平12・7）であつたが、私は前稿でこれを否定し、「第三歌群は、寛弘六年（一〇〇九）から同八年（一〇一一）までの三年間の詠草を、年次は整えずに季節の順に並べたものであると考える」と述べた。しかしながら、今回の新出部分の出現で、季節順の配列が年を越えて翌年に渡つてゐることが明らかになつたのだから、「年次は整えずに季節の順に並べ

た」というのは通用し難くなった。森田氏の言われるように従来の第三歌群が寛弘七年の詠草を集めたものであれば年次の繋がりは一実自然である。改めて森田説を再吟味することが必要だろう。

② 86番歌と87番歌との間に、少なくとも1丁分の脱落があること。85・86番歌に『御堂関白集』に載せられるべき要素が見出せないため、後に御堂関白家ゆかりの人物の歌が存在したはずであることと、諸書に載りよく知られた大斎院選子内親王の歌が87番歌の前に脱していることが明白なことから、書写上のミスか親本の落丁かによる脱落を想定せざるを得ないことがわかった。

③ 九十首の歌から成るこの時雨亭文庫蔵『法成寺入道殿御集』も『御堂関白集』の完本とは言えないのではないかとということ。最後の90番歌に返歌がないこと、五月五日の詠という一年の途中で終わっていることが月次配列の歌集の末尾としては不自然なことから、本来はこの後にもっと多くの歌が存在したのではないかと想像される。前稿に記した通り、「もともととは長期間にわたる多数の詠草を年代順・季節順に配列した大きな歌集であった」可能性がいつそう強まるのである。樋口芳麻呂氏は、『冷泉家時雨亭叢書』の「解題」において、「残欠本でない『法成寺入道殿御集』によって、新出の十七首の歌が知られるのであるから、その資料的意義は極めて大きいと言えよう」と言われているけれども、資料的意義の大きさはその通りだが、途中で脱落があるのは別にしても、この本もやはり残欠本と言わざるを得ないだろうと思うのである。

第三歌群が仮に寛弘七年の詠草であるにしても、寛弘元年の第一歌群、寛弘二年の第二歌群との間に四年間の空白があるのは、やはり四年分の詠草が脱落していると考えるのが自然である。したがって、時雨亭文庫本の出現によっても、我々が見ることのできる『御堂関白集』はまだまだ完本にはほど遠いと思われる。さらなる新伝本の発見によって、その全貌が明らかになる時を心待ちにしたいものである。

〔付記〕はじめに記した通り、本稿は平成十六年度後期の大学院での演習の成果に基づくものであり、用例の検索や資料の探索をはじめ、個々の和歌の読解に関しても、演習担当者の発表から多くの示唆を得ている。いちいち出所を記すことができないので、ここに演習参加者の氏名を記して謝意を表するものである。

小川〔圃〕陽子 相原宏美 新井和美 大園岳雄 鎮西美佳

金岡文緒 岡田潤 田村圭佑（敬称略）

なお、歌集の引用はすべて『新編国歌大観』により、『栄花物語』『大鏡』『源氏物語』『枕草子』は『新編日本古典文学全集』（小学館）に、『御堂関白記』は『大日本古記録』（岩波書店）にそれぞれよった。

——せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教——